

アウトドア環境教育カリキュラムに関する研究

西浦和樹・足立智昭・相原芳市・畑山みさ子・石川隆・熊坂聡・松本晴子・村野敬一郎・大島衣
白石雅一・白木悦子・田中一裕（発達臨床学科）

背景と目的

教育基本法の改正に伴い、大学教育においては、豊かな人間性を備えた社会人を育成することが急務となっている。従来にも増して、資質、能力、知識の異なる学生や留学生に対して、入学から卒業までを通じた組織的かつ総合的な学生支援が求められている（図1）。

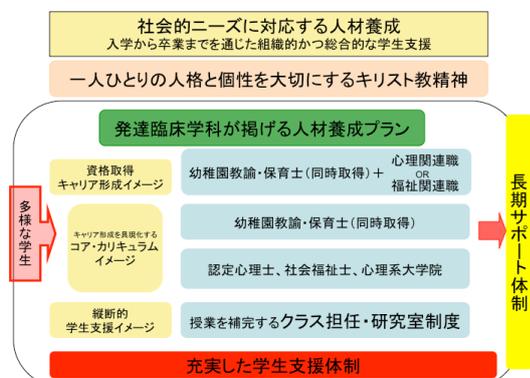


図1 発達臨床学科の人材養成プラン

本学では、学生の視点に立った独自のコミュニケーション・スキル育成を目指した学生参画型の授業支援プログラムを数多く備えている。例えば、発達臨床学科では、初年次教育の早い段階でコミュニケーションの基礎を学ぶ機会として、オリエンテーションキャンプ（図2）をスタートアップ



図2 初年次教育としての発達臨床学科オリエンテーションキャンプ（4月入学時）

プログラムとして位置づけ、レポート作成の仕方について学ぶ基礎実習、保育について実習を通して学ぶ教育・保育実習の報告会（図3）など、学生が主体的に活動に参加することに配慮した授業内容となっている。

さらに就職・修学支援として、長期にわたる幼稚園での教育実習、児童館での保育実習、社会福



図3 保育実習情報交換会の一場面

祉施設での社会福祉現場実習、あるいは心理、福祉、保育の領域にテーマを絞った卒業論文などの卒業要件科目を設定している。これらの取り組みは、学生の資質、能力、および専門的知識を高めることを可能にし、高い就職率や社会福祉士合格あるいは大学院進学実績に結び付いている。

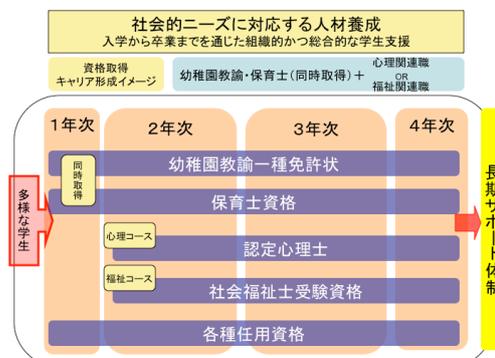


図4 幼稚園教諭と保育士資格の同時取得と各コースの資格取得によるキャリア形成

発達臨床学科の最大の特徴である学生参画型授業の分析を試みるために、(1) 調査・実験データ処理や効果測定システムの構築、(2) コミュニケーション・スキル支援、(3) 地域の活動や連携の取り組みとして、子育て支援ボランティア活動の事例を研究対象にして教育研究を推進してきた。

例えば、(1) については、卒業論文等の研究成果の蓄積、保存し、広く成果を公開することである。

(2) と (3) についても同様に、学生同士が保育実習先での様子を意見交換する等、積極的にコミュニケーション・スキルを向上させる仕組みを構築している。特に、2 年次以降の専門教育科目では、心理コースと福祉コースに分かれての授業を多く配置し、専門職としての資質を育成するための授業が展開されていることは、近隣の保育士養成校にはない特色の一つである。

先行研究を通して、コミュニケーション・スキルの向上、ストレス感の軽減、実践的問題解決力の向上が期待できることを示してきた。また、単一学科に留まらず、学科間でのデータ共有による学内情報の一元化を図ることで、留学生への日本語教育 (J)、e-learning システムを利用した英語教育 (E)、アジア・アフリカ地域への異文化交流 (I) といった多様なコミュニケーション・スキル支援プログラムに対して、FD 活動の一環としての他学科への参画型授業支援を行うことも可能となることが示唆された。

ここで、学生の資質向上を目指す際のキーワード、すなわち「学士力」について考えてみよう。例えば、中央教育審議会答申における、学士力に関する主な内容は、以下のとおりである。

- (1) 知識理解：専攻する特定の学問分野における基本的知識の体系的理解 (異文化、社会、自然に関する知識理解など)
- (2) 汎用的技能：職業生活や社会生活でも必要

な技能 (コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力など)

- (3) 態度・志向性：自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、社会的責任
- (4) 統合的な学習経験と創造的思考力：自らがたてた新たな課題を解決する能力

このような学士力に相当する基礎力を育成するには、初等教育と中等教育で重視されてきた「生きる力」を継続的に育成することが重要であると考えた。この「生きる力」について、文科省が、これを教育の基本とすることを提言して以来、その「力」をどのように育むべきか、多くの議論がなされてきた。しかしながら、それらの「力」をどのような環境で統合的に育むべきかの議論は少ないのが現状である。

本研究は、保育者を目指す学生がいかにして文科省が定義する「生きる力」、すなわち、

- (1) 主体的判断・行動による問題解決
- (2) 他者との協調性
- (3) 健康と体力

上記の3点は、アウトドアの環境でこそ統合的に育成されるとの仮定に立ち、様々な教育プログラムを計画し、それらを体系立てて実現することを目指した。

具体的なプログラムは、アウトドア環境教育の研修会を実施すること、さらにアウトドア環境教育の先進国である北欧諸国の資料を収集することとした。これらの研究成果を通して、保育学生の質の向上に資する知見を提供することが可能であると考えた。

実施内容 1：アウトドア環境教育研修会

本研修会は、本学科と発達科学研究所との連携により実現し、2010年8月19日に附属幼稚園で実施した (図5)。本研修会では、スウェーデン王立リンショーピング大学アウトドア環境教育研究

所所長、アンディッシュ・シェパンスキー教授を招聘し、アウトドア環境での保育の実践理論を学ぶことを意図していた。

シェパンスキー氏は、研究所の所長として、現在までスウェーデン国内の幼稚園教員 4000 人に対する教育経験を有している。氏の在籍するリンショーピング大学では、コース登録すれば、どのような学生でも、アウトドア環境教育プログラムを受講することができる。大学院の修士課程と博士課程のコースもあり、カナダ、ドイツ、中国、ベトナムなど、世界中の大学生がこのプログラムを受講している。

スウェーデンでは、肥満児が社会問題になっており、肥満児への食育を推進して、日本食を広めようという取り組みがある。1980 年頃、人は 1 年間で 20 リットルの砂糖を飲んでいましたが、現在は 90 リットルを飲むに至っている。このような状況で、肥満児が増えると税金や国の予算も増えることになるので、国家予算の問題になるという意識がある。1920 年から 2006 年までの研究では、アウトドア教育で、子どもが運動することができれば、子どもの骨密度の問題が解消されることも示されている。

さて、リンショーピング市は、首都ストックホ

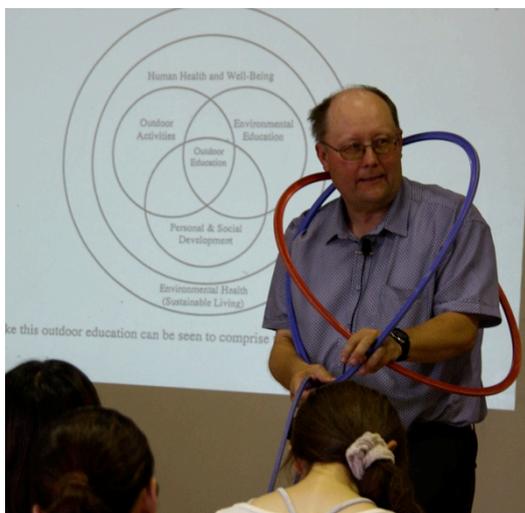


図 5 アウトドア環境教育の概念図を独自の 방법으로説明するシェパンスキー教授

ルムから列車で 1 時間ほど南西に位置し、ストックホルムとヨーテボリを結ぶヨータ運河の畔にある。また、森と湖に囲まれた自然豊かな自然環境を持つ。

教師は、アウトドア環境から教材を選び出し、数学的知識と言語的知識を子どもたちに学習させる。その際のキーワードは、「エデュテインメント」である。

アウトドア環境教育の理論を学んだ後に、幼稚園の園庭を活用して、実際にエクササイズを通して遊びの研修を受けた。

「初めて出会った人の名前を覚える遊び」では、参加者は、一方の手（右手）を前に差し出し、握手可能な相手を見つけ出し、挨拶と自己紹介（名前を憶える）した。その終了後に、別の手（左手）に切り替え、別の相手を探し求めて移動した。7 回繰り返す、7 名の名前を記憶するまで行った。この 7 という数字は、マジックナンバーに関連する。この遊びは、アイスブレイクを目的として実践される。

また、「ボールを使った遊び」では、参加者は輪になってボールを回す（図 6）。リーダーが「Go Around」と指示を出すと、ボールを持っているプレイヤーは輪の外を一周走った。ボールを回す際



図 6 運動技能の発達を考慮した実践例

に、頭の上、胸、足下など高さに変化をつける、ボールの個数を増やす、掌や甲を使うなど、遊びに変化をつけて遊びに参加した。この遊びは、運動技能の発達に関連している。

「動物遊び」では、まず、参加者は二列（鹿と家）に並び、家（頭上で三角）、水（掌を口元）、食料（お腹）の三つのポーズを決めた。そのあと、一方の列（鹿）が向かい合う列（家）で同じポーズの参加者を探し、競争した。同じポーズの参加者をうまく探すことができなければ、鹿は死亡する。この遊びは、動物の生存競争についての学習のために活用される。

「ロボット遊び」では、参加者は3人一組になり、そのうちの1人がオペレータ、残り2人がロボットとなり、背中合わせに立ち準備した。オペレータは、ロボットの肩をたたいてロボットを操作することができた。その際、オペレータがロボットの肩を1回たたくと、時計回りに90度回転した。最終的に2体のロボットを握手させるように工夫することが求められた。これは、算数の角度についての学習を促す遊びである。

「ロープ遊び」では、参加者はロープを手に取り、ロープを「○」、「△」、「□」の形にして、そ

の中に立った。「○の人」という具合に、リーダーの指示した図形の中に立っているプレイヤーは、別の図形の中に移動しなければならなかった。この遊びは、算数（図形）についての遊びである。

以上の通り、本研修の概要をまとめると、アウトドア環境から教材を選び出し、数学的知識と言語的知識を子どもたちに学習させることであった。また、それら知識を駆使して、子どもたちは認知能力と創造性を高めることができること、アウトドアでの遊びの理論的背景についての説明を聴くことで、アウトドア環境での遊びが十分に工夫されていることを明らかにした。

次に、実際にスウェーデンで実施されている教員研修会の中での様子を報告する。

実施内容 2：スウェーデン・アウトドア環境教育の先進国での資料収集

今回のスウェーデン訪問では、2010年9月23日から10月2日にかけて、リンショーピング大学のキャンパスがあるリンショーピング市とノルショーピング市、さらに教員研修会の開催されたカールスタッドの3都市を訪れる機会を得た（図7）。

本実地調査の目的は、アウトドア環境教育であ



図7 今回訪問した3都市（左からカールスタッド、リンショーピング、ノルショーピング）

る北欧での異文化交流を通して、現地の子育て環境の実態を調査し、加えて、アウトドア環境教育の先端研究で知られるリンショーピング大学での教員養成プログラムの理論と実践に関する資料を収集することであった。

ノルショーピングでは、毎年カルチャーナイトという地域参加型の交流イベントが一日中開催される。このイベントのために、市民リーダーが全体を取りまとめ、市民個人が自分たちでイベントを企画し、一晩を通じて市民同士の交流の機会を演出する。今回のイベントでは、日本チームが結成され、ノルショーピング博物館の一面を借り、日本文化をスウェーデンの人々に提供することとした。ここでは、緑茶を嗜む、米粉パンを試食する、といった日本の食文化を企画した。9月24日のイベント前日から準備に取りかかり、当日に向けて食材の調達や会場のセッティングを行った。9月25日のイベント当日は、スウェーデンでの日本文化ブームと相まって、会場を訪れる市民が絶えない状態であった。会場の日本ブースは、着物を着た日本女性がお茶を出してくれる、あるいはモチモチした食感の米粉パンを味わいたいという家族連れ、カップル、子どもたちといった一般市民が絶え間なく訪れる状況で、イベント時間を大幅に延長するほど大盛況であったことを記しておく。



図 8 カールスタッドでの教員研修会の様子。様々なロープの結び方を確認する。

その後、リンショーピング大学に移動し、アウトドア環境教育研究所の施設見学を行い、実際に現地の大学生 20 名がアウトドア環境教育を受講する様子を見学した。この 20 名の半数近くは地元の大学生であるが、残りはヨーロッパや中国からの留学生も含まれた。今回は、アウトドア環境教育の初回の授業ということで、授業内容は本学での研修会と同様の講義であった。

カールスタッドでの教員研修会は、9月28日早朝から9月29日までの期間を利用して実施された。このカールスタッドの研修施設は、夏場はキャンプ場として賑わうが、シーズンを過ぎると比較的閑散とする。またこの時期は教員が参加しやすいことを理由に挙げる参加者もいた。今回は、8名のプリスクールと小学校の教員、アウトドア用品の会社に勤務するインストラクター、リンショーピング大学教授という構成で、前日からキャンピングを貸し切って、2泊3日のアウトドア環境教育の研修会に参加した。

研修会の内容は、アウトドアでの草花の名称を確認しながら、それらの匂いを感じることで、さらにロープを使ってビニールシートが風であおられないようにする方法、あるいはテントの応急修理の仕方といったアウトドア環境での実地訓練プログラムであった(図8)。ここでの課題は、数人の



図 9 リンショーピング市内のプリスクールの保育環境

グループで話し合いながら、参加者は問題を多くの観点から解決しなければならなかった。したがって、このようなアウトドア環境教育では、参加者の創造的問題解決能力を獲得し、そしてそれら問題解決の態度形成の点で効果があると考えられた。

最後に、リンショーピング市内にあるプリスクールを訪問した。ここでは、園舎自体は平屋建てで、今の園舎は30年程度になるとのことであった。子どもたち数人は、園庭にある木の上から出迎えてくれた。また、園舎の奥には、湖に面した小さな森があり、子どもたちは普段から秘密基地として利用しているとの説明を受けた(図9)。このような保育現場の状況から、アウトドアとインドアを分け隔てなく教育するための環境が整っていると考えられよう。

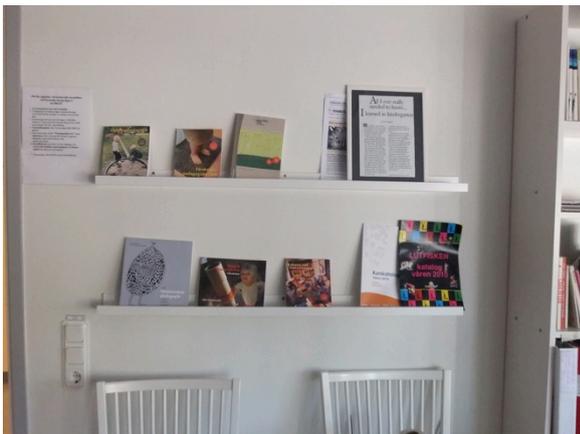


図10 プリスクールの職員室にある図書資料

なお、本研修会で紹介された図書資料については、本学科図書室に寄贈されている。これら図書資料は、スウェーデンの就学前教育についての全国的指針 Lpfö98 に記載されている事項に沿って作成されている。スウェーデンの就学前教育に関わる教員は、Lpfö98 に記載されている内容に沿って保育することが求められている。このような図書資料は、職員室に常備されており、教員が普段からアウトドア環境教育を実践する環境に置かれている(図10)。

今後、スウェーデン国内に留まる図書資料の収集と分析によって、アウトドア環境教育がいかんとして主体的な問題解決に繋がるのかを明らかにしたい。それによって、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会に貢献するために必要な能力を培うことができるであろう。

【参考文献】

- 文部科学省(2009)資料5-2 「学士課程教育の構築に向けて：中央教育審議会の答申の概要. 学術分科会(第29回)・学術研究推進部会(第22回)合同会議 配付資料
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryu/attach/1247211.htm (2011年2月27日)
- Szczepanski, A. (2011) 野外で学ぶことの大切さ：スウェーデンのアウトドア環境教育を学ぶ 発達科学研究, Vol. 11 (印刷中)